

祖考

金子 農

学部 of 演習で、レポートや論文の添削についてちよつとした講義のようなものを受け、いざ自分の作物を添削しようという段になって、私はある一文にとりかかった。

『東アジアにおける瓦の使用は紀元前十世紀、周代の中国にまで遡ることができる。』

考古学の演習で、私は沖繩の瓦、中でも高麗系古瓦と呼ばれる沖繩最古の瓦を取り扱ったレポートを執筆しているところだった。この高麗系古瓦は文字通り朝鮮半島の高麗王朝時代の様式によく似た特徴を有した瓦群であり、やや時代が下って大和王朝は九州から「大和系瓦」が渡ってくるよりも百年程度前に、高度な技術者集団と共に南島に伝来したと目されている。先端の尖った紡錘状九弁やハート形八弁の美しい蓮華文と簡素にして流麗な蔓文を備え、他の地域では見られない下端が直線を描く軒平瓦さえもみられる。

添削にあたって問題になるのは文章の後半だった。さかのぼることができ、*sakanoborukotogadekiru* とはアカデミックな論文の一節としては冗長である。漢語に置き換えた方が望ましい。この冗長さを排すために和語を漢語に置き換えんとする学術的な語法は私の主義には反するものの、それはこの瓦についてのレポートには関係のないことなので、おとなしく置き換えられそうな言葉を探す。「遡れる」、とはいくまい。「遡る *sakanoboru*」、あるいはそう、「遡行できる *sokoudekiru*」と

う言葉が多少なりとも語義をそのままに文章を短くまとめ上げられるのではないかとという考えに至った。

しかし、遡行？ 遡って行く、と読み下せるこの単語は、果たしてどうだろう、この場合に正しく使用できるものだろうか？ 私は電子辞書を開き、「そこう」とかな入力で単語を検索した。「遡行」の文字は最初に出てくるわけではなかった。下にスクロールしていく。私の指は「遡行」ではなく、別の「そこう」のところまでまった。

「祖考」。

1… 死んだ祖父。また、死んだ祖父と死んだ父。

2… 遠い先祖。

死んだ祖父――。

私は二年前の晩秋に鬼籍に入った母方の祖父を思い出した。

八十歳で鬼籍に入った私の母方の祖父は大学を出て後公的機関で働く科学者・物理博士だったらしい。らしい、というのも、彼は私が生まれた世紀末にはもう六十を過ぎており、私が物心ついた頃にはもう定年退職し、すっかり隠居じみた生活を送っていたからである。加えて母の実家と私が住んでいた川崎の父の実家は歩いていけるような距離にはなく、私自身が物理学をはじめとするいわゆる理系的な知識にはあまり興味がなかったこともあって、祖父との接点はほとんどなかった。ただ母から、昔から少し歩くだけでも疲れたというような人で、日がな一日居間のリクライニング機能付きの椅子に座りっぱなしでいることもままあるような運動嫌いの人だとよく言われていた。この運動嫌いは相当筋金入りのものだったと思われる。彼が死んだ

のも、あまりに運動しないがために肺周りの筋力が弱り、自力では呼吸できなくなってしまうたからだのだ！ 煙草は吸わない人だったものの加齢のためか肺に小さな穴がいくつも空いていた。しかしそれにしただって、十人並みに運動していればまだ自力で呼吸できるだけの筋肉はついていたらしい。そう医師が言っていたと母から聞いた。

しかしつい最近、この一月の末になって、なんでも普段から肉食を避けていたためにたんぱく質が不足していたことが主要な原因だったのだと、何の自覚もなしに彼女は発言を翻した。私にとっては所詮すべて伝聞であるから、まして母のことだし、話題が話題だし、何が正しいかなぞ到底できようはずもない。人体に起こる何らかの問題について原因をたつた一つに絞ろうとするは自体きわめて困難で、どころか不可能なことさえ多いのではないだろうか。

研究者だった祖父は転勤族であり、四十代を半分過ぎた母が中学二年になるまでは彼は筑波の学園都市にいた。話は以前母から聞いたはずで、私はよく覚えていないが、筑波に行くよりも以前に何度か東京や神奈川のどこかへ転居していたことがあったらしい。母は家の次女で、三番目に生まれた子だった。だから第一子である姉や長男である兄が生まれた頃のことについては彼女も話を聞いたことがある程度でしかないだろうが、とにかく生まれてこのかた父方の実家の土地に住んでいる私とはかけ離れた暮らしをしていたらしいということはよくわかった。横浜の神大寺にある今の家に越すと中目黒辺りの研究所に勤務することになって、現在の首都大に通っていた母は毎朝とはいわないまでも頻繁に車で送ってもらっていた。

祖父は車の運転をこと好んでいたらしい。十年以上前の話になるが、私が少し離れた幼稚園に通っていた頃や、ほとんど家の目の前にある学校に通う小学生だった時分には、幼稚園の一室を借りて行われる造形教室へ祖父の運転する車に乗って行くことが多かったようにも思う。造形教室、という言葉がどの程度人口に膾炙した、メジャーな表現なのかは私にはよくわからないが、そこで私は絵を描いたり工作をしたり、色々な、これといってまとまりのないことをしていた。造形教室から家に帰ると母方の祖母がいて、私は買ってきていた菓子パンを食べた。この人物はかつて家庭科の教師で、隠棲した今でも裁縫編物を趣味とし、また非常に巧妙な布細工を作る。この前、といっても二年ほど前だが、毛糸で編んだ室内履きを送ってくれた時などは、冬の寒さを和らげるために大いに役立てたものである。そういえば、こうして祖母が家に来ている間、母はきまつて姿を消していた。一体何をしていたのか、当時の私は知る由もないことだった。

さて、その動くのが大嫌いな祖父が、どんな理由だったか入院してしばらく経った二年前の九月頃、母は私を筆頭にした四兄弟を車に乗せて彼の入院先である横浜、だかの病院に向かった。病院外部の歩道橋を伝って二階相当の位置から院内に入る。エレベーターに乗り、あの消毒液の匂いの充満した廊下を通って祖父のいるいち病室に入り、彼の顔を見ると、一年とあかない間にすっかりやせこけた祖父は鼻に挿した管を行くあてもわからぬほど長くのばしていた。一年？ いや、もしかするとその年は母方の実家には行っていなかったかもしれない。祖父は

運動も嫌い、苦手としていたが、それと同じくらいには、騒がしかったり人のやたらと多かったりする空間も苦手としていた。さほど広くはない居間に普段見ないやたら背の高い末娘と凶体だけは立派な四人の孫が詰めかけても、気詰まりするとうか、とにかく心安らぐことはない、そういう性癖の持ち主だった。

久しぶりに顔を合わせた祖父は、以前会った時の私の記憶に残る、椅子に座っても立ち上がっていても、細身でありながらしゃんとして一本体を貫く芯のようなものがあつた姿とは打って変わって、ベッドに寝転がり、何枚かの薄い布団をかけられて、死人一歩手前といったふうに徹底して顔の肉が削げており、視点が変わったせい目付きからもかつての峻厳たる雰囲気は抜け落ちて、いつもかけていた眼鏡がないせいもあつてか、ほとんど別人のようになっていた。いざ始めると止まらないお喋りもなりをひそめて、すっかり静かで、覇気が抜けているとはこんな風なことをいうのだろうか。肌の色が全体的に濃い茶系の色にくすんで、所かまわずとくべつ色素の濃い染みが浮いている。本当にすっかり変わってしまったのだ。私は内心驚き、少し悲しんだ。そして心の内でひっそりと、これが死ぬまぎわの人間か、などと考えた。

多分受験生だったのか、よく覚えていない。記憶があいまいになっている。とにかく私はその時一応大学受験に向けて勉強していたはずで、祖父にも大学での生活について、漢籍ほどの程度読んでいましたかとか、そんなとりとめもない質問をしたように思う。何と言ったか文字に起こせるほどはつきりとは記憶していないが、あまり芳しくない答えが返ってきたことだけ

は覚えている。それもそうだ、祖父が大学に進学したのは終戦から少なくとも五年が経過した時期で、夏目漱石や芥川龍之介の存命時、彼らの青年期や幼少期とは、まるで勝手が違っているべきでさえあるだろう。

その祖父が十一月辺りに死に、葬式が営まれたとき、棺に入った祖父は死化粧を施されて、病室で見た時よりも白っぽい顔をしていた。私は薄っすらと、さてはこの体は冷凍されていたのをここに持ち出してきたのではないかと考えた。白い色が霜の降りているように見えたからだ。死化粧は血色がよく見えるように施されるものと聞いているが、病床の彼の、言ってしまうと汚らしげに染みを散らした肌のさまを思えば、半端に赤味をさしていくよりかは、こうしてくすんだ死の色を薄める趣向の方が、見栄えが良くなるのではないかと思つた。じつさい花に囲まれた彼の姿は、肌が妙に白以外は、眠っているのと大差ないみかけをしていたのである。

予定日からびったり三ヶ月早く生まれてきた私は、自白すると、下町住まいの土地持ちの家よりも、学園都市の学者の家に生まれたかった。金属の研究という私とは興味関心のベクトルのまったく異なっている祖父だったが、しかし私の実際の父母であるあの二人よりは、私にほんの少しでも近かつたのではないだろうか。もしかすると、ほんの少しだけでも、近くあつてくれる人……近い、ではない。私は彼とは比べ物にならない、卑しい人間であると自負している……そのような人は「僕」を一人称とする、老いてなお見るからに聡明で賤ならざる気品のあつたあの人のくらいだつたのではないだろうか。

少し彼が羨ましかった。学位をとれば研究機関に勤めることができる時代というものが羨ましかった。しかし、そのような時代に生まれたところで私は元服するような歳まで生き続けることができたのだろうか？ だいたい三ヶ月も早く生まれた未熟児を生かしたNICUの先端機械技術は八十年前には影も形もない。なにしろ私の生まれるのが五年早ければ、七カ月で生まれた未熟児の私は到底生き延びられなかったらしいのだから。いや、その当時にはまだ今の私の父母も生まれていない以上生まれてくる私の父母もまた別の人間であるのが道理で、とくれば……何もかもが無意味な仮定だ。

障害者を標的とする事件についての意見に、「自分がもしそのような境遇にあつたらそんなことを考えるのか」、つまりは「そのような（つまり、彼らのいうところの「障がい」を持った）」境遇に生まれたら、「そんな（障害者を標的とする殺人を許すほどに差別する）」ことを考えるのか、というものがある。これは、右と同じくらいにナンセンスな仮定である。ある対象を差別する者は、事実自分がその対象のようでないからそうしているのだ。私もまた、事実そのようでないからそうに仮定しているに過ぎない。右のような仮定をする者の、理性も悟性もかなぐり捨てた知性足らずの不埒な輩であることが、これでよくわかるだろう。

私には三人の弟がいる。次の春で上から高二、中三、小六に進級し、中の弟はつまり受験生ということになる。両親、とくに母は、よりよい進学のために学習塾に通わせようとしているらしい。やたらと金のことを話題にするのでよくわかる。つい

この前、この二月にも、折に触れて金の話を組上に載せるのだ。

「塾代つてなると、月三万やら七万じやきかないから」

上の弟も一応学習塾に通っていたし、私も高校・大学受験共に冬の終わりまで講師の世話になつていたから、別段中の弟が塾に行くこと自体に反対はできないし、そのつもりもない。不満なのは、好き勝手に四人も子供を作っておきながら金について一々長兄にまで気兼ねさせてくるような母の態度である。

このご時世に四人も食い盛りの、それも下の三人は現役の野球少年である男子を育てるというのは、それだけでかなりの金が必要なことだろう。それはそうだが、食費でさえかなりかかるに決まっている。野球だって金のかかるスポーツである。それらに出す金は、その程度なら、まああるのだ。だが学問となると途端に母は渋い顔をする。渋い顔？ いや、わざわざ顔を歪めるのではない。いかにも拒否せんとする雰囲気を出すだけだ。しかしそのさまはあまりにも賤である。

いや、かかる額の桁が違うのだから、当たり前のことなのだ。それは勿論十分理解している。しかし、やはり納得しきれるところではない。

金がどうこういうのなら、ひとつ一切の資産をこちらに公開してはどうだろうか？ ろくに情報を公開せず、なにかと相手に気遣いを要求するような雰囲気を出して言外に他人を牽制しようとする母の態度には、ほとほと辟易する。

一昨年の夏、父方の祖母の六十九歳の誕生日を祝うべく、綱島街道沿いの寿司店に行った時のことである。私の隣に座る叔父夫婦には二人の男子がいて、歳も二歳程度しか離れていない。

下の子は首もすわるかすわらないかといった時期で、成程可愛い盛りといった具合である。上の子を見て私は、その子の父である叔父に、にこにこ笑顔を浮かべながらこんなことを言った。

「いやあ、性格歪みますよこの子は。こんなに歳の近い弟がいると」

続けて、ははは、と笑い声を出す。よく言われるのだが、私の笑顔はどうも本心から笑っているようには見えないらしい。

実の親に向けてひどい戯言である。侮辱といってもいい。しかしこの讒言にも一応根拠があるのだ。

現在こそスポーツ新聞社でデスクの仕事を担当している父は、往時、私が物心ついてすぐからつい四五年前まで、各地を転々とする単身赴任の記者として働いていた。母は実質女手一つで……無論すぐ近所に住む舅・姑の手を借りなかったわけではないが……私を含めて四人の子供の面倒を見ていたわけだが、これは到底できることではない。幼子というのは目を離れた隙に何をしてくすかわからない生き物であり、ろくに動けない新生児はともかく、よちよち歩きの一二歳児や好き勝手し盛りの三四歳児を一人の監視で、それも複数数をどうにかするなど不可能である。そこで母は一番歳が上で「まとも」な私を、何をするかわからない弟共の監視役として任命したわけだ。ついぞに躰については私が勝手にやっていただけという可能性もある。しかし息子にそんなことをやらせておいてそれを放置しているというのは、親として問題のある行動ではないだろうか。

これは経験した人間にしかわからないものだろうが、この歳

の餓鬼というのは危険であるばかりかろくに命令も聞かない、ぐずる、「イヤイヤ期」などという愛らしい名前さえも悍ましいものに見えるほど、この頃の人間は本当に非理性の塊である。

なにが、「買物だけでも疲れる、以前は大変だった、週に一度、木曜日に父母（つまり私にとつての祖父母）に来てもらっていなかったら、到底回らなかった」だ！ 四人も餓鬼を育てることが言語に絶する困難を伴うことも想像出来ないのか、たった一人ですえ苦勞を要するだろうに！

私に言わせればこうだ……親が世話もできない人数の子を産むべきではないし、目付役を長子に任せるなど言語道断、後々まで口喧しく干渉する神経質かつ偏屈な人間が完成し、その人間の一生に多大な害を及ぼす。

それから、調子に乗って遊びのつもりで殴り掛かってくることさえあった。私が反撃しようとするたび母が間に入って来て私だけを止めるのだ。過去殴り合いをする息子たちを放っておいたら私が弟の脇腹を何度も蹴りつけたり執拗に目を狙ったりして、「流石に危険だ、大怪我をしたりしたら大変だと思った」らしいが……そもそも四人もの人間を年功序列的でなく育てることなど、出来るのか？ 暴力的な長男が弟に一生もの大けがを負わせたりする前に止めようとしたというが、なぜ暴力の結果としての死が確実に刑事罰に直結する年齢まで暴力を抑制し続けたのか？ 幼いうちに、事故で処理できる年齢の内に一人二人死んでいたところで、問題はないのではないか？

ひどいポジショントークだということは十分に承知している、しかしその上で言いたい、なぜ四人も餓鬼を作ったのかと。私の父は長男で下に三人の弟妹がいる、しかも下の二人、長女と

次女の間には流産した子がいて、そのせいで二人の歳はかなり離れている。なぜそこまでして子を四人産まねばならなかったのかと。この家には家を継ぐ者は四人の子を持たねばならぬという決まりでもあるのかと。全て憶測で、私は何も知らされておらず、何もかも知らないのだ。少なくとも私は、この土着の家ともこんな家の人間を伴侶に選んだ母とも相容れない氣質を有しているように思えてならない。秀才多き家系の学者の娘に生まれておきながらこんな土地の人間を選んだ母が恨めしい。地元に着した家系など非理性の温床以外の何もものでもないというのに。

憎いといえば、それこそ私を構成するすべてが私の憎悪の対象といってもいいのだ。骨格の異様に膨れ上がった顔が憎い、柔軟性のない貧相な肉体が憎い、ろくに人の顔と名前も覚えられない低スペックな脳が憎い、髓まで腐りきった性根が憎い、何も考えることなく生きてきたこれまでが憎い、地元の卑しい風土と人間が憎い、親の知能が知れるけつたいな名前が憎い、ろくに明るい展望の描けない未来が憎い。

そう、だから、何もかもなんだ、何もかも！ ……何をまるで一貫性のないことを書いているんだ、私は！

こんな、きつと私の知る私と血のつながった人間の内で最も高い知性を持つていたであろう人について語ろうとしていながら、こんな、下らない、一山いくらの価値もないような人間について牛の涎のように書き連ねるなど、愚の骨頂以外の何ものでもない。

私は、何か扱う題材をだしにして、手前の好き勝手にその題材とまったく関係のない物事を語る論者が反吐が出るほど嫌い

で、憎悪してさえいるのだ！ その時々々のヒット作を扱って世相を語ったりしようとする社会学者やら批評家やらがいるだろう、あれらは結局のところ主張せんとする意向・ドグマがあつて、それを主張するための道具として題材を扱っているに過ぎない。何と近代的なことだろうか。道具的理性、道具的題材！ 結局そのように語ることは人のドグマの奴隷であり、世界に対して盲であるということになる。彼が見るのは世界ではなくドグマ、よくてドグマの鑄型に嵌め込まれ歪曲せしめられた世界なのだ。私は密かに尊敬する物理学者だった我が祖考の見たように、内なるドグマによる変質を伴わざる世界というものを見ようと思う。そして私自身その格率に従うならば、もうこれ以上こんな下らないことを語るのは止めしなければならぬだろう。

先の年明け、一周忌を終えておよそ二年ぶりに母方の実家に顔を出すことになった。板張りの廊下は嘗てと変わらず空気がひんやりとして冴え渡り、その廊下から空気の隔離された居間は暖房のきいて暖かい。未だ整理されきっていない本棚に、私は古い獨和辞典をみとめた。双解獨和小辞典、編著者片山正雄。私の曾祖父にあたる人物のものではないかと祖母が言った。彼は夜間の大学で学び官僚として定年まで勤め上げたのち英語科の教師をしており、卓抜した教授法を備えていたのだという。その夜間の大学で、どうも彼は英語と共に獨逸語も学んでいたらしい。

頁をめくると、かなり年季の入っているのがわかった。紙はかなり薄く、一枚越しに指が透けて見えるほどで、なるほどこ

ういうのをパラフィン紙とでもいうのだろうか。装丁は深い茶色だが、白かっただろう内部の頁も変色し茶色がかっている。単語は詰屈たる獨逸文字で書かれ、一々頁を繰って順列を確認しないことには初見では読み得そうにもない。漢字も一部は旧字体で書かれている。戦前の版であることは明白だった。

「多分曾祖父のじゃあないですかねえ。ああでもどうだろう」
などと言いながら私は奥付をめぐった。初版発行昭和八年、今私に手に取っているのは改訂第二十二刷で、発行昭和二十七年のものであった。総革製定価一〇五〇円。その表示の左には、南江堂NANKODOと書かれた切手が貼られ、青で「片山」の字が縦長の楕円の中に収まった印が捺されている。それらをはじめ発行者、発行所、製本所云々が頁下半分、左三分の一に収められ、版刷表記のやや右上に、青紫色の印気でもって祖父の名の漢字四つが捺印されていた。